

九州情報大学学術・教育研究所報

KIIS Academic and Educational Research Institute Report

第 8 号 令和 6 (2024) 年 3 月

◆目次

- ・令和 5 (2023) 年度学術・教育研究所センター活動報告 …所長 平田 毅 …1
 - 経営情報・データサイエンス研究センター …センター長 荒平 高章 …1
 - 地域情報・生涯学習センター …センター長 秋吉 浩志 …2
 - 国際交流センター …センター長 クリス・フリン …7
 - 学習支援センター …センター長 合田 和正 …7
- ・共同研究報告 骨疾病オルガノイドの作製と基礎的評価 …荒平 高章、東藤 貢、名井 陽、森崎 絢可 …8
- ・令和 5 年度 教育改革事業報告
 - 初年次教育における課題探究を基盤とする実習の設計と評価(継続)…荒平 高章 …9

◆令和 5 (2023) 年度学術・教育研究所センター活動報告

所長 平田 毅 教授

学術・教育研究所は、本学の教育および研究の発展に資するため、学内・学外の多様なフィールドで活動している。その活動の主体となっているのは、下部組織にあたる各センターである。令和 5 (2023) 年度からは、それまでの 6 つから 4 つのセンター、すなわち経営情報・データサイエンスセンター、地域情報・生涯学習センター、国際交流センター、学習支援センターに整理統合されて活動を行っている。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う行動制限が大きく緩和されたこともあって、各センターの活動はほぼ‘全面復旧’し、さらに活発なものになった。以下において、4 つのセンターそれぞれの活動概況について報告する。

・経営情報・データサイエンス研究センター

センター長 荒平 高章 准教授

1. 経営情報・データサイエンス研究センターについて

令和 5 年度より、経営情報・データサイエンス研究センターが新たに立ち上がった。近年の高等教育機関において、データサイエンスの素養・技術を大学生に身につけさせ、社会に輩出することが求められている。その一方で、データサイエンスは文理問わず様々な分野で利活用ができ、その応用範囲は広く、教育にとどまらず研究でも同様のことが言える。したがって、本センターは、「経営情報」、「データサイエンス」をキーワードとした研究活動を本学が主体となり推進していくための役割を担うことを目指す。

2. 令和 5 年度の活動報告

今年度は、本センターの立ち上げに伴い、基盤整備が主な活動であった。具体的には以

下の通りである。

- 1) データ分析等に係る設備の整備
- 2) データ分析等に係る協力企業先の調査
- 3) 研究センターの活動内容の検討

1) に関しては、データを取得、蓄積が可能となる機器を導入した。この機器も含め、研究や打ち合わせ等ができる場所の確保には至っておらず、これは今後進めていく予定である。

2) に関しては、キャリアデザインセンター（CDC）に協力企業の情報提供等を依頼し、また学内の講義等で訪問された企業の情報等を調査した。

3) に関しては、研究センターとしての活動内容について 1)、2) の状況と照らしつつ検討を続けている。

3. 令和 6 年度の活動計画

次年度の活動計画であるが、引き続きセンターの設備等を含めた基盤整備を継続し、実際に外部企業や大学等も含めた協力体制の確立、さらには共同研究等へつなげていきたい。また、他大学の研究者や企業の方々と交えた研究会や交流会の計画・実施、学内の研究者による研究会や交流会、共同研究等のネットワーク構築なども視野に入れた活動を展開していきたい。

・ 地域情報・生涯学習センター

センター長 秋吉 浩志 准教授

今年度より生涯学習センターと地域情報センターが合併し、「地域情報・生涯学習センター」として始動した。生涯学習センターは生涯学習推進のため、広く地域のニーズに即した各種公開講座や講演会などの企画・開催を通して、本学の研究・教育の質的な向上を図るとともに、本学が蓄積する研究・教育の成果を幅広く地域の教育文化の発展向上のために還元し、社会貢献に期することを主な目的としていた。

また、地域情報センターは、鹿児島県甕島での「アイランドキャンパス」の取り組みと、地元太宰府の水城小学校「パソコンクラブ」への学生サポートの派遣の二つを柱として、今年度も取り組みを推進してきた。活動としては、地域交流・地域貢献に本学の人的・知的資源を活用しつつ、そこに参加する学生がそれらの活動を通して諸能力の向上を図るという目的のもと、これらの事業に取り組んできた。

新しい地域情報・生涯学習センターの活動は、これらの 2 つのセンターの事業を引き継いでいる。以下において、今年度に行った事業やその運営に携わった本学教員・学生の状況についてそれぞれ報告することにしたい。

1. 公開講座の企画・開催の概要

令和 5 年度は、情報系 7 講座、語学系 4 講座、自然科学系 2 講座、スポーツ系 2 講座の計 15 の公開講座を企画し、これらのすべてを実施することができた。これらの講座の日数は 15 日間（9 日間）、受講者総数は延べ 159 名（148 名）であった（括弧は昨年度の実績）。数字が示すとおり、今年度のセンターによる公開講座が前年度よりも増加したことが分かる。以下に示した表がその詳細である。

令和5年度4月～9月 公開講座の実施・開講の一覧

種別	講座名	開催日		時間	受講者数	講師	学生サポート人数
語学	「英検」面接試験 対策講座 (1)-①	6月17日	土	10:00-12:00	6	教員	
	「英検」面接試験 対策講座 (1)-②	6月24日	土	10:00-12:00	6	教員	
科学	夏のほしぞら観察会	8月22日	火	19:30-21:30	39	教員2	5
情報	はじめてのパソコン① ～基礎・インターネット編	9月5日	火	13:00-15:30	6	学生	-
	はじめてのパソコン② ～ワード前編	9月8日	金	10:00-12:00	9	学生	8
	はじめてのパソコン③ ～ワード後編	9月8日	金	13:00-15:00	9	学生	9
	はじめてのパソコン④ ～エクセル前編	9月12日	火	10:00-12:00	12	学生	10
	はじめてのパソコン⑤ ～エクセル後編	9月12日	火	13:00-15:00	12	学生	9

令和5年度10月～3月 公開講座の実施・開講の一覧

種別	講座名	開催日		時間	受講者数	講師	学生サポート人数
語学	「英検」面接試験 対策講座 (2)-①	10月21日	土	10:00-12:00	4	教員	-
	「英検」面接試験 対策講座 (2)-②	10月28日	土	10:00-12:00	4	教員	-
科学	冬のほしぞら観察会	令和6年 2月7日	水	19:00-21:30	19	教員2	5
スポーツ	かけっこ教室	10月28日	土	10:00-11:00	13	職員 (陸上部監督)	3
		10月29日	日	10:00-11:00	18		4
情報	ワードとエクセルで年賀状を作ろう！！	11月7日	火	13:00-15:30	2	学生	5
		11月10日	金	13:00-15:30		学生	8

2. 学生講師・学生サポーター が情報系講座を担当

本センターの情報系の公開講座（上記表「はじめてのパソコン」「ワードとエクセルで年賀状を作ろう！！」）は、積年にわたって本学学生が講師を務めてきた。またほぼすべての講座において、学生が受講生のサポートや講師の補助を担当している。

情報系の講座の場合、講師担当の学生は、講座のテキストを自ら作成し、そのテキストを使用しサポーターの学生とともに、講座の運営にあたる。これは本センターの公開講座の独自の特徴であるといえる。情報系パソコン講座の場合、受講生1～2名に対して1名

の学生サポーターが付いて、随時懇切丁寧な支援を行うため、受講生の理解も円滑に行われる。

こうした要因からか、本センターの情報系講座の評判は非常に高い。受講生の概ねが講座に満足していることが毎年、講座後のアンケートからも窺える。

しかし、近年その学生人材確保が困難になってきている。全体の学生数が減少してきたことにより、同一学生が繰り返し講師・サポーターを務めなくてはならない場合が増加している。それぞれの公開講座の学生講師・学生サポーターを限られた少人数の学生に対して依頼せざるを得ない状況が続いている。しかも、講座開催時間と履修授業が重なっていることも多く、自ずと上級生（4年生）に頼らざるを得ない状況である。このことは、講師・サポーターの世代交代がスムーズに運ばない事態を招いている。

本センターの公開講座は、情報系を中心として、本学学生の知識技能の定着化やスキルアップ、キャリア形成に寄与している部分も多いため、学生の積極的参加を促していきたいが、学生人材の養成と確保は大きな課題の一つである。

3. 教職員による公開講座の新設・増設

一方、昨年度に引き続き今年度も本学の教員が講師を務める公開講座にも力を入れた。

語学系の『英検』面接対策講座はその一つである。クリス・フリン教授が担当し、インタラクティブな講義形態と本番の面接試験さながらの個別指導も交え、受講生からは高評価であった。中学生・高校生の参加が多かったのもこの講座の特筆すべき特徴である。この講座は、好評だったため前後期それぞれ2回開講した。

また、筆者による「星空観察会」も地域貢献に資する試みであった。本学の天文サークル「だざいふ星空研究会」の学生もサポーターとして参加し、令和5年8月と令和6年2月に開催された。8月当日はあいにく天候が悪化し、急遽教室でのスライドを使用した講座となってしまったが、昨年度同様、数多くの親子連れの参加があり、夏休みのひとときを星空談義で飾った。また、2月の観察会は、参加人数は少なかったものの、天候に恵まれ、冬の星空案内を中心に観察会を行い、参加者を含め盛況であった。

今年度到新設された公開講座は、本学の学園祭2日間に開催されたスポーツ部門の「かけっこ教室」である。本学の陸上部監督が講師を務め、陸上部部員がサポートを行い、小学生の参加者を中心に盛会のもと終了した。

そもそも、地域情報・生涯学習センターの目的の一つが「本学が蓄積する研究・教育の成果を幅広く地域の教育文化の発展向上のために還元」にあることを踏まえるならば、このように新たな講座を一つ開設できたことは意義深い成果であると考えられる。引き続き公開講座を中心に来年度も積極的な活動を行っていきたい。

4. 水城小学校「パソコンクラブ」へのサポート学生の派遣

太宰府市立水城小学校の「パソコンクラブ」（月曜日 6 時間目）への学生サポーターの派遣は、太宰府市教育委員会生涯学習課（当時）の要請により始まった。平成 25（2013）年から実施しており、今年度で 11 年目となった。

初年度は、同小学校・本学とも児童支援のあり方をめぐって模索の状態であった。3 年目からサポーターとして参加した学生達が、立案・実施の主体となって実際の運営を任されるようになった。それに伴って、学生の参画主体としての自覚も育つようになってきたように思う。

サポーターとして派遣される学生は、主として教職課程履修者である。したがって本事業は、こうした学生にとって教育実習の事前・事後学習としての意味合いも副次的に兼ね備えている。なおサポーターとして参加する学生は、センターの人材バンクに登録されて

いる者から選ばれている。

今年度にサポーターとして派遣された学生は、延べ 12 人（7 回派遣）であった。サポーターの活動内容は、パソコン教室等で使用されている小学校向け学習ソフト「ジャストスマイル」を利用した活動への支援、およびロイロノートというお絵かきソフトを活用した講座の運営である。実際の運営にあたっては、全体進行を担当する学生と個別の児童をサポートする学生とに役割を分担し、児童一人ひとりに寄り添うサポートを行った。今後の課題は、昨年度同様に学生サポーターの確保と世代交代の円滑化、そして活動内容の充実・創意工夫である。

令和 5 年度 水城小学校パソコンクラブへのサポート状況

日程	活動内容	児童数 (昨年度)	学生数	日程	活動内容	児童数 (昨年度)	学生数
1 4/24	クラブ開き	未開講	0 (0)	5 11/13	ロイロノート で写真撮影	30 (20)	2 (2)
2 6/12	タイピング練習	32 (19)	1 (3)	6 12/18	ロイロノート で写真撮影	30 (未開講)	1 (0)
3 9/25	ペイントで お絵描き	36 (20)	2 (2)	7 2/13	撮影した写真の発表	35 (18)	2 (2)
4 10/16	ペイントで お絵描き	30 (20)	2 (2)	8 3/4	撮影した写真の発表	35 (20)	2 (2)
延べ合計						228 (117)	12 (13)

(括弧は昨年度の実績)

5. 甬島「アイランドキャンパス」の取り組み

平成 24 (2012) 年から実施してきた鹿児島県薩摩川内市甬島をフィールドとした地域交流・地域実践の試み(甬島「アイランドキャンパス」プロジェクト)は、令和 5 (2023) 年度で 12 年目を迎えた。途中、令和 2・3 年度の 2 年間は新型コロナウイルス感染症の影響で休止せざるをえなかった。しかしながら令和 4 年度になると、同感染症がある程度沈静化したこともあって、「アイランドキャンパス」は再開することができたのである。そして今年度は 9 月 22～25 日に開催され、本学から教員 1 名・学生 9 名が参加した。

「アイランドキャンパス」プロジェクトの中核的な取り組みは、例年 9 月末に行われる瀬々野浦地区の運動会への本学学生の参加である。今回は、はじめて参加した学生が多かったこともあり、運動会と併せて甬島を「体験」「発見」してもらおうプログラムにも重点を置いた。たとえば甬島で「島の風景を取り戻す」ため、10 年来精力的に活動を続けている山下賢太氏(東シナ海の小さな島ブランド株式会社代表)から、活動の内容や島の

状況について詳細な聞き取りを行った。これは大きな成果であった。また、こしきハニーのぶ工房のスタッフやこしきの塩の有馬慎悟氏など、特産品の開発に取り組んでおられる方々の新しい活動についても知ることも出来た。そこには、常に若い人たちの活躍を見出すことができる。それらの潮流に本学学生たちが触れることは、今後のプロジェクトの原動力になりえたとし、学生たちの人生の糧になりえたと考えている。

こうした甑島に実際に赴いての活動を踏まえて、令和5年10月28・29日に開催された本学の学園祭において「甑島フェア」を行ったが、その内容は昨年度よりも大きく充実したものになった。このフェアでは、甑島の特産品タカエビとキビナゴなどの販売を行った。このように本学と甑島の方々との共同プロジェクトは、今年度になって本格的に再スタートできた。

また、11月11日には西鉄二日市駅横の大宰府客館跡広場で開催された「だざいふ物語り」にも「甑島フェア」として参加することができた。広く一般市民に甑島をアピール機会になったと思っている。そして、今後の甑島「アイランドキャンパス」プロジェクトの継続と発展に繋がっていくものと考えている。

6. その他

平成31（2019）年から地域の情報発信事業「だざいふなび」（太宰府市商工会主催）の会員向け情報発信サポートが、地域情報センターの新しい事業として加わり、店舗・企業のホームページ編集作業等のサポートを行うために本学学生が積極的に参加していた。これは、情報発信の教育の一助となるとともに、「情報大学」としての本学の存在意義を地域にアピールする点で意義のある活動であったと言えるだろう。しかしコロナ禍を機に令和4（2020）年度に一旦活動を休止し、本学の地域情報センターのセンター長が理事会に継続的に参加するのみで、今年度になっても学生が参加する活動までには至っていない。

また、いまのところは地域情報・生涯学習センターの所管ではないが、地域社会とのかかわりを意図した本学の活動として、eスポーツ同好会の開設がある。これは今年度4月に誕生した学生のサークルである。今年度は、太宰府市との共同開催により、eスポーツ体験会を「五条いきいき情報センター」（太宰府市五条）にて計3回開催した。

今年度の体験会は、高校生、親子連れ、年配者という各年代層を意識して企画・実施したが、こうした試みは本学にとって初めてということもあり、実際の運営は試行錯誤、手探りといった状態であった。しかしながら実際に開催してみると、特に年配者や親子連れの人たちには順番待ちが出るほどの盛況ぶりであった。このeスポーツ体験会については、今年度の反省を踏まえて、来年度から地域情報・生涯学習センターの正式な事業に組み入れて開催していく予定である。

7. まとめ

全体的にみると、令和5年度の地域情報・生涯学習センターの活動は、新型コロナウイルス感染症に関わる活動自粛からほぼ全面的に回復し、コロナ禍以前の活動に戻りつつある。さらに公開講座では新設の講座などの動きに見られるように、センターの活動はより積極的に展開されている。次年度4月からの活動も諸状況を見定めながら行わざるをえないが、学外活動もさらに増えることが想定される。ともあれ上記の活動をできるだけ継続し、そしてFacebook ページ等のSNSも有効に活用しながら、地域情報・生涯学習センターの諸活動を積極的に情報発信していきたい。

・国際交流センター

センター長 クリス・フリン 教授

国際交流センターは地域の国際交流事業に積極的に関わってきた。コロナ禍を経て、令和5（2023）年度になって各種の国際交流イベントが再開されたが、特に大学が位置する太宰府市の催事については、以下のとおり本学教員と学生が参加した（いずれも主催は太宰府市国際交流協会）。

- ・フレンズベルのつどい 6月25日（金） 教員1名、学生3名
- ・国際理解講座および防災講座 令和6年1月8日（月） 教員1名、学生4名
- ・日本文化講座 令和6年2月3日（土） 教員1名、学生5名

また国際交流センターのセンター長が、太宰府市国際交流協会の理事会には3回、運営委員会には8回出席しており、地域の国際交流に積極的に関与している。

・学習支援センター

センター長 合田 和正 准教授

1. 学習支援センターの目的と役割

学習支援センターの目的は、履修登録、教養学習、リメディアル学習、資格・検定試験等に関わる学生相談と学習支援を行うことにある。前年度まではこれらの業務を基礎学習支援センターと資格学習支援センターが担当していたが、各センターの改組・統合を受け、学習支援センターが両方の役割を担うこととなった。

2. 令和5年度の活動報告

今年度は改組後の1年目であるので、基本方針として前身の上記2組織の活動内容を踏襲した。主な活動内容は以下のとおりである。

第1に、基礎学習支援センターからの業務継承として、昨年度と同様に「学習支援室」を開設し、学生からの質問・相談に備えた。新型コロナウイルス感染症に関わる行動制限が徐々に緩和されていったことに伴い、昨年度に続いて学生と対面しながら相談に応じることができた。学生が気軽に相談しやすい環境に配慮して、図書館前の多目的ホールやカフェテリアにブースを設置し、相談員には大学院生をはじめとする上級生が担当した。

ブースの開設時間帯については、昨年度同様に前期後期とも、開講期間中の毎週月曜・木曜（週2回）の正午から13時までの1時間に設定した。この時間帯に設定した理由は、以前と同様に1年生と2年生の必修科目の講義が当日に開講されることを考慮した結果である。

第2に、資格学習支援センターからの業務継承として、Google Formsを用いた小テストの作成についての研究を実施した。これは、学生の自主学習環境改善の手段の1つになることを目的として、学内共同研究として昨年度以前から継続して行われているものである。具体的には、Excelの表とGoogle Formsとの間で相互に小テスト問題・解答選択肢をそれぞれ対応する形式に変換できるようにした。ただし、出題形式や選択肢の個数などはプログラムを簡単なものにするために制約をつけた。昨年度はプロトタイプ版を作成したが、今年度は制約を少し緩和したプログラムを作成し、検証した。

3. 今後の課題

学習相談室の課題は、学生のあいだでの認知度がまだ高いとは言えないことである。かねてから様々な機会を通じて学生相談室の利用の呼びかけを行ったが、利用回数の増加には結びつかなかったようである（今年度の利用回数全 16 件、うち授業などの学習関連 4 件、昨年度 5 件）。

来年度以降は、新カリキュラムで開講される「スタディスキル」「ラーニングリテラシー」との連携を意識しつつ、初年次学生を中心とした学習相談、そして資格・検定試験の相談と学習支援を積極的に実施し、学生全体の学力向上に寄与したい。

Google Forms を用いた学生の自主学習環境改善のための研究についても引き続き取り組んでいく。

◆共同研究報告

骨疾病オルガノイドの作製と基礎的評価

荒平 高章 准教授（研究代表者）

東藤 貢（九州大学、共同研究者）

名井 陽（大阪大学、研究協力者）

森崎 絢可

（九州情報大学大学院経営情報学研究科 1 年、研究協力者）

1. 研究背景

近年の再生医療分野では、iPS 細胞の台頭により、様々な難治性疾病に対する発症機序の解明や創薬研究が活発化している。しかし、難治性の疾病においては、動物を用いた病態モデルを人工的に作製し、その動物を用いて検証を行うことが現在の研究では主流となっている一方で、これらのモデル動物による実験は動物愛護の観点などから代替法による実験手技の検討も進んでいる。そこで、本研究課題は、難治性の疾病の中でも先天性骨形成不全症に焦点を当て、その疾病を有する組織を生体外で人工的に作製することを目的とし、それらを用いて疾病の発症機序や創薬研究に応用することを目指す。

2. 方法

96 ウェルプレートに I 型コラーゲンを填入し、 -60°C で凍結後、 -50°C で凍結乾燥を 24 時間実施した。凍結乾燥後にグルタルアルデヒド飽和蒸気下で 37°C 、4 時間化学架橋を行った。その後 0.1M グリシン溶液に 12 時間浸漬し、ブロッキングを行った¹⁾。

培養に使用した細胞は、マウス骨芽細胞様細胞株 MC3T3-E1 および Runx2 欠損マウス由来骨芽細胞様細胞株 RD-C2 を使用した。作製したコラーゲン足場材に MC3T3-E1 または RD-C2 を合計 1.0×10^5 細胞となるように配合比率を変えて播種し、一定期間 37°C 、5% CO_2 、100%湿式環境で培養を行った。一定期間培養後、圧縮弾性率や細胞数と ALP 活性についてはプレートリーダで吸光度を計測することによって評価した。

3. 結果と考察

弾性率については、骨芽細胞様細胞の割合が多いと高い値を示す傾向にあった。細胞数と ALP 活性においては配合比率を変化させることで異なる挙動を示した。特に、骨芽細胞様細胞単体は、細胞数、ALP 活性双方において培養日数の経過に伴い、増加傾向を示し

た。また、Runx2 欠損型骨芽細胞様細胞単体は、細胞数は増加傾向を示したが、ALP 活性はほとんど変化しなかった。

以上の結果より、異種細胞を用いた共培養によって、力学特性や材料特性の異なる骨様組織が作製できる可能性が示唆された。

4. 最後に

本稿では、異種細胞を使用した特性の異なる骨様組織の作製について実験・検討を行った。この結果をもとに、実際の骨形成不全症の骨組織との比較検討を実施し、さらに詳細なオルガノイドの作製を行っていきたい。

参考文献

- 1) 森崎絢可、荒平高章、名井陽「三次元足場材と細胞による疾病骨オルガノイドの作製」『臨床バイオメカニクス』44、pp. 281-284。

◆令和5年度 教育改革事業報告

初年次教育における課題探究を基盤とする実習の設計と評価（継続）

荒平 高章 准教授（研究代表者）

1. 事業背景

近年、データサイエンス教育の活発化により、データの分析・可視化・説明を想定した問題解決型学習が再び注目を集めている。しかし、現在の大学において初年次教育では、技能ベースではなく知識ベースでの教育が多くを占めており、初年次に一つでも多く実習系科目を設けることで、知識と技能を結び付ける経験を学生に与えることが重要であると考えられる。

そこで、本事業では、初年次教育の中でも限定的な開講科目であるプレゼミ I・II を対象に課題探究を基盤とした問題解決型学習を実施し、高等学校と大学2年次以降の仲立ちを行い、受講生が大学教育・研究に対する心構えを修得するだけでなく、大学教育への取り組み方、研究への取り組み方に関する基礎的素養を修得することを目的とする。また、昨年度より継続申請している課題であり、前年度との比較について報告することとする。

2. 事業内容

後期開講のプレゼミ II において、昨年度と同様、ペットボトルロケットを題材とした PBL を実施した。前年度は、2年生の基礎ゼミ学生を比較として参加させたが、今年度はプレゼミ II 履修生のみで実施した。具体的には、「ペットボトルロケットを遠くへ飛ばすためにはどのような設計にしたらよいか」という指示を最初に学生に与え、個人で自由に調査をしてもらい、その後試作してもらった。試作したペットボトルロケットを試射してもらい、必要に応じて再度作り直しや検証を行った。最後の時間に一度だけ飛ばしてもらい、飛行の様子や試射との違いなどを考察してもらった。

3. 結果と考察

作製に係る時間においては、昨年度と比較すると個人で実施したため、情報機器に頼った調査を実施していた。昨年度はグループでの実施の場合、グループ内で議論する場がし

ばしば確認されたが、個人実施の場合、インターネット検索によって様々な情報を取得していた。また、昨年度と比較して、今年度の学生はそれぞれが明確なコンセプトを持って作製していた。具体的には、「飛距離を伸ばすペットボトルロケット」、「美しく飛ぶペットボトルロケット」などである。個人での実施とすることで、情報取得、設計、作製まですべての過程を一人で実施する必要があるため、昨年度よりも主体的に学生自身で行動できていた。この主体的な行動は、より専門性の高くなる上級生になった時に必要となる素養であり、卒業研究等でも必要である。しかし、その一方で、グループ活動による他者との協働も必要であり、これら双方を経験させることが重要であると考えられる。

4. 最後に

本稿では、昨年度に引き続き、初年次教育における問題解決型学習を取り入れた実習の実施報告を行った。次年度も引き続きプレゼミを開講する予定であり、上記のペットボトルロケットによる実習は個人実施として継続しつつ、グループ活動で実施可能な実習を新たに導入したいと考えている。

◆原稿募集

教員各位の教育・研究活動に関する原稿を募集します。たとえば教育・研究報告、学会報告、書評、文献紹介、翻訳などです。『研究論集』に掲載するほどの分量はないが、論文執筆のための準備作業として書き留めておきたいこと、日頃の教育・研究に関連して思うことなどでも結構です。ただし『研究論集』との違いを明確にするため論文は掲載しません。なお、原稿の作成・提出にあたっては、「九州情報大学研究論集編集・発行基準」「九州情報大学研究論集執筆・投稿要領」を遵守してください。詳細は学術・教育研究所までお問い合わせください。

九州情報大学学術・教育研究所報 第8号

発行日 令和6(2024)年3月31日

発行所 九州情報大学学術・教育研究所報編集小委員会

〒818-0117 福岡県太宰府市宰府六丁目3-1

TEL 092-928-4000

※掲載された原稿の著作権は本学に帰属します。

無断引用を禁止します。